

[巻頭言]

「一つの節目の中で～紀要の一考～」

東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法専攻
古林 俊晃

本学に来て5年が過ぎ、一つの節目を感じた。大学にも随分と慣れ、居心地もよくなってきた。こちらに来た時には、ありとあらゆるものが新鮮で、一方で、異なる環境に慣れるまでに時間もかかった。慣れとは恐ろしいもので、感じていたことが感じなくなる。見ていたことが見えなくなる。一方で、もともと目には見えづらいものもある。サン・テグジュペリ氏は星の王子さまの中で「大切なことは目に見えない」と述べているし、金子みすず女史も星とたんぼぼの中で、「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」と。いずれにせよ、見えないものにこそ我々にとって気づくべき大切なことがあるのだと偉人達は忠告している。これは我々の研究にも言及できる。

本学に着任して以来、今日まで紀要委員を続けてきた。しかしこれまで紀要にはほとんど関心がなかった。必要性が見えていなかった。委員として若い者に紀要の投稿を薦めるにも内心では気が引けていた。若い者には自分の研究成果を国内に留めておくのではなく、積極的に海外に発信してもらいたいと思っているからである。小さな世界ではなく、大きな世界で真の評価を仰ぐ志を研究者として抱いて欲しいと思っているからである。しかし最近、委員として紀要の在り方が気になりだしたのも事実だ。論文を書くにはそれなりにルールがある。昨今、研究倫理や研究資金をめぐるあり方が問われている。特に研究倫理では研究者の怠慢による問題も取り上げられる。データの捏造、改竄、アイデアの盗用や剽窃などである。中には本人が気づいていない場合がある。これらの問題は組織としてお咎めを受けることになるが、もっと単純な問題として、論文の成果をやたら大きく見せようと結果以外のことに論点を広げたり、引用文献を十分に理解せず用いて誤った解釈をした議論などがある。これらの過ちは査読を受けることで気づくこともある。見えなかったものが見えるようになるのである。さらには研究者として、自分の専門領域にかかわる内容ではありながらメジャーな論文に投稿するには及ばないが、どうしても伝えておきたいものもあるであろう。内容により学会員でなければ投稿が許されない場合もある。このような場合に紀要は都合がよい。見えないものが見えるようにするのである。一方で本学科の各専攻ではそれぞれ特徴をもった教育活動が行われており、その証を紀要に残すことで、本学の教育活動を特徴づけることができる。目下、文部科学省の高大接続改革が急速に進められ、大学ばかりでなく学部内での教育改革も求められる。今後は各専攻での取り組みなどの教育活動報告において、紀要は広報としての役割も担うことになるであろう。往古来今、この紀要に残された全てが本学科の学術研究・教育活動の歴史を知る一つの資料となるのである。そのためにも今後とも積極的に紀要への投稿をお願いしたい。

とは言え、やはり慣れとは恐ろしいものである。本学部を離れ、紀要委員の役を解かれると、本執筆で気づいた紀要の大切さも見失っていくのかもしれない。もっとも、もっと大切な紀要の役割が見えていないのかもしれない。その節には、所詮愚鈍の身の私、何とぞお許しを願いたい。ただ真に思うは、研究であろうと教育であろうと、大切なことを見続ける、知ろうとする努力の大切さである。であれば見ていたことが見えなくなることもなくなるであろうし、見えないものが見えるようになるのであろう。弘法大師は般若心経秘鍵の中でこのように説いた。

医王の目には途に触れて皆薬なり、解宝の人は鉱石を宝と見る。何誰か罪過ぞ

(優れた医者は道端の草に薬草を見だし、宝石を知る人は鉱石の中から宝石を見分ける。慧眼を持つ持たないは誰のせいでもなく己の問題である)

間もなく新年度を迎えるが、怠惰な私に、そろそろ本学部を離れ、新設される新天地でもう一度新しい目を持ち、新鮮な気持ちを思い出し、それを忘れるなど、新たな機会を与えられたような気がしている。